

まえがき

伝え残したい家族の歴史

私・美穂子は、昭和20年（1945年）の第二次世界大戦終戦時に、朝鮮半島北東部（現・北朝鮮）の港町・清津（せいしん）から、母と幼かった弟2人とともに4人で引き揚げてきました。

家族ひとりも欠けることなく日本の土を踏めたのは、一緒に引き揚げてきた人々の中でも私の家族だけでした。当時の私は12歳、生涯でもっとも苛酷な体験は、鮮烈な記憶として残っています。母亡き今となっては、私以外にその時の事情や状況を覚えている者はいません。私が記憶している限りを書きとめ、弟たち、清津で生まれた憲樹（かずきちょう）、憲二郎（けんちろう）、日本生まれの貞彦（あびちゃん）、それに私の子どもたちに伝え残したいと思います。

美穂子

わたしの昭和時代 ◇ 目次

まえがき

伝え残したい家族の歴史 美穂子

家族構成

引き揚げルートと留め置かれた町

子ども時代を過ごした清津の町の地図

引き揚げ前の清津の風景

咸興で世話になった朝鮮人のおじさんからの手紙（帰国後）

第一章 生い立ち

両親のこと

清津のこと

清津で過ごした子ども時代

第二章 終戦直後に避難民になる

終戦2日前のソ連軍侵攻で避難民に

8月13日前夜に逃れた人々

茂山から咸興へ

第三章 咸興の恩人

叔父夫婦の脱走

ソウルの伯父の手配

恩人との出会い

27 27 26 26 24 22 20 20 14 14 10 7 6 5 4 3 1

恩人による援助

第四章 威興の過酷な暮らし

生牡蠣事件

ソ連兵の官舎へ薪泥棒に

興福寺にひとり残される

ソ連兵による殺害

興福寺での食事

憲二郎の病氣

シラミが媒介した発疹チフス

第五章 日本へ

威興からソウルを経て釜山へ

釜山から日本へ帰国

第六章 引き揚げ後の少女時代

大原での少女時代

茂原へ移住

第七章 親族のその後

実父の菩提寺を訪ねて

母・芳子の弟・藤吉叔父の引き揚げ後の人生

母・芳子の弟・猪之助叔父について

母・芳子の弟・又男について

28

37 34 34 33 33 31 30 30

41 39 39

44 43 43

52 49 48 47 47

引き揚げ前の
清津の風景



弥生町から高珠山を望む



国際ホテルとその付近

【思い出】

藤吉叔父さんと愛子叔母さんが結婚式をあげたホテル



公會堂（高珠山より）昭和初期

第一章 生い立ち

両親のこと

私は昭和8年（1933年）10月6日、清津で生まれました。

実父は、山口県出身の上利栄吉（あがりえいきち）、母は芳子（よしこ）です。父は私が生まれた前後に、結核で亡くなりました。私には姉もいたようですが、幼い頃に腸チフスで亡くなり、私の記憶にはありません。父は山口県で生まれ、朝鮮半島へ渡ったようです。父の弟・正三（婿入りしたため改姓）も清津にいて、清津生まれの娘が敏子といます（現在は山口県在住）。私の手元には、父が友人たちと写った1枚の写真が残っています。

母は明治42の田舎町・倭館（ワイカン）で生まれました。

母の両親は九州の大分出身。欧米列強に並ぶべく近代化を推進した明治時代（1868～1912年）は、植民地政策がとられ、朝鮮半島に近い九州や山口県あたりから、多くの日本人が入植しました。母の両親も朝鮮半島でひと旗挙げようと渡っていったのでしょう。倭館で、母を含め8人の子どもを産み育てたようです。

倭館は川が流れるだけの片田舎で、母の両親は塩を商っていました。私の家族は酒飲みが多いのですが、祖父もまた大酒飲みで、一家は貧乏をしていたそうです。捨て育ちの8人兄弟は、男の子が多かったこともあり、近所で「土谷のガキ」と呼ばれるほどに悪ガキだったと、母が語ったことがあります。また、末の弟・又男が帝国大学まで行っていますが、母は尋常小学校しか出ていません。

母は、夫を亡くした後、幼い私と2人で暮らしていました。器用な人で、呉服の仕立てをして生計を立てていたのを覚えています。

私が7歳になった時に、母の兄・道輔（みちすけ）伯父のすすめで、母は沖村（おきむら）と見合いをしました。後に父となった沖村は、なぜかその頃、ラナンの病院に入院をしていて、見舞いを口実に様子を見に行くというかたちで互いを確かめたようです。母は「あんなひ弱な男は嫌だ」と断ると、道輔伯父に「相手は初婚。お前は子連れで再婚する立場で何だ。贅沢を言うな」と叱られて、しぶしぶ再婚したそうです。

母が沖村と再婚したのは、昭和14年（1939年）のことだったと思います。憲樹が生まれる1年前、私が8歳の時でした。母は未亡人になったのが23歳の頃、再婚したのが29歳か30歳でした。父・沖村はとてもよい人で、私も実子同様に育ててくれました。

再婚した父・沖村との間に、憲樹は昭和15年（1940年）7月3日、憲二郎は昭和17

年（1942年）7月に、清津で生まれています。その下に俊朗が、昭和19年（1944年）生まれましたが、終戦前の昭和20年3月に天然痘で亡くなりました。

父・沖村は、清津で一番大きな本屋・中屋文房具店の番頭でした。中屋は3階建てに地下もある大きな建物で、清津中の本や文房具を商い、教科書も、当時すでに配給になっていた物資も一手に扱っていました。

店の地下には講談社発行の子ども向けの本も並んでいて、私は小学校から帰ると、ここで『桃太郎』や『浦島太郎』といった本を開いて眺めたものです。父に「新しい本だから汚しちゃだめだよ」と言われると、「はい」と返事をして、手に取っていたのは楽しい思い出です。

両親の再婚後、私たちはそれまで借りていた狭い家から天馬山のふもとの裏手に位置する天馬町に引越しました。父はここから繁華街の中屋まで通っていました。

母は朝鮮生まれでしたから、朝鮮語が達者でした。それでなくても、朝鮮人が頭にカゴをのせて、いろいろなものを売りに来るので、朝鮮語の日常会話は必要でした。毛ガニなど大きなものが獲れて、日本人の家庭へ売りに来たものです。「オルマヨ」とは「いくら？」です。そのくらいは私にもわかりますが、母は、「負けて」「いくらにして」などと、朝鮮語で交渉して、買っていました。市場へ行っても朝鮮人と交渉です。雇っていた女中さん

のことを、朝鮮語で「オモニ（おばさん）」と呼んでいましたが、オモニとのやりとりも朝鮮語ですから、母は朝鮮語がペラペラでした。

ちなみに母は8人兄弟の2番目の生まれ、8人のうち女は2人だけで、妹は幼い頃に首に腫瘍ができて亡くなっているため、男兄弟に囲まれて育ちました。そのためか、男勝りの猛烈に気の強い女性でした。母は倭館で生まれ育ち、清津へと移ったようです。実父とも清津で出会ったのではないのでしょうか。

母の兄・道輔は、ソウルで所帯を持っていました。母のすぐ下の弟・藤吉（とうきち）は母と同じく清津に移住、清津から咸興への逃避行をともしました。その下が猪之助（いのすけ）で、満州に移住して材木商を営んでいました。さらに又男（またお）という叔父がいました。8人兄弟と聞いていますが、私と縁があつたのは、この4人だけでした。

母と私は、朝鮮半島時代も引き揚げ後もずっと一緒でした。私が結婚した当初の10年ほど、東京の団地にいた時期がありました。が、「帰ってこい」と言われて茂原の家へ戻ってきて、母が亡くなるまで、ひとつ屋根の下で暮らしました。母の子どもの中で女は私ひとりでしたから、母のことは私がいちばんよく知っているとは思いますが、子ども時代のことなど、多くを語りはしませんでした。

清津について

清津は、朝鮮半島の北東部（現・北朝鮮）に位置する港町です。旧ソビエト連邦との国境に近く、緯度で言うと、北海道の中ほどにあたります。

朝鮮半島は、咸鏡北道、咸鏡中道、咸鏡南道、平安北道、平安南道などに大きく分けられます。道とは、北海道の道と同じ使われ方です。清津は咸鏡北道で最も大きな町でしたから、最盛期には6万人ほどの日本人が暮らしていたようです。

大陸性の気候で、夏は暑く、冬は極寒、どんよりと空が曇り、深い霧に包まれます。夏の暑さはそれほどでもなかったと記憶していますが、冬の寒さは厳しく、一寸先も見えないほどの濃い霧に包まれて、結核や神経痛など、身体の弱い人は清津にいと死ぬと言われるほど、厳しい環境でした。

私が朝鮮半島にいた当時は、世界地図を見ると、日本列島、樺太、朝鮮半島、満州、台湾は日本の領土として、赤い色で塗られていました。清津の町には日本人の商店が並んでいましたが、もともとから住んでいた朝鮮人も大勢いました。植民地として入植した日本人は威張っていて、便所の汲み取り作業や重い荷物運びなど、きたない下働きはすべて朝鮮人にやらせていました。日本人家庭で働く女中さんはオモニと呼ばれた朝鮮人の女性でしたし、市場も朝鮮人が多く働いている場所でした。

母など、帰国後も在日の朝鮮人を見ると、面と向かつては言わないまでも「朝鮮人のくせに」などと馬鹿にしていました。支配者意識が染み込んでいたのでしょうか。

清津で過ごした子ども時代

母は若い頃からタバコと花札やマージャンが好きな女性でした。

私が小学校へあがるまでの間、母は、昼間はタバコを吸いながらマージャンをしていたものです。私が「母ちゃん、おなかすいた」と言う、「大和軒行って、うどん食べといて」と10銭玉を手渡されます。清津は坂の町です。坂を下りて、大和軒へ行くと、店の人に「また母ちゃん、いないの?」と聞かれます。「母ちゃん、花札してる」などと答え、ひとりうどんを食べて、また坂道を戻ったのを覚えています。近所には遊び相手もなく、他に何をしていたのでしょう。特に寂しかった覚えはありません。母は夜なべで仕立物をして、いつも起きているようでした。

清津にあった公会堂に、日本から歌手・伊藤久男が公演に来たことがあり、伊藤久男のファンだった母とふたりで行ったこともありました。

憲樹が昭和15年（1940年）生まれ、戦争が始まったのが昭和16年（1941年）で

したから、伊藤久男の公演は戦争前のことだったのでしよう。

また、ある時、母に、ガラスの金魚鉢に入れた金魚を「藤吉叔父さんの家まで持っていてやれ」とお使いに出され、転んで手を切ったことがありました。今もその時の傷が残っているので、よく覚えています。

私の家は清津の町外れ、天馬町にありました。天馬山のふもとをたどり、鉄道の官舎や病院を過ぎ、清津府庁の前を通り、街中を通って、また山の方へ坂道を上っていくと、その奥に清美温泉（きよみおんせん）という娯楽施設がありました。藤吉叔父・愛子叔母夫婦は、そのすぐ下に住んでいました。子どもの足では1時間ほどもあつたでしょうか。結構な道のりでしたが、母はそんなことには頓着しない人でしたから、金魚鉢を抱えて歩いたのです。

ところが、病院の前あたりで転び、割れた金魚鉢で手を切ってしまいました。包帯を巻いてもらって、泣きながら家へ帰ったのでした。

ふだんは母のことを「かあちゃん」と呼んでいたのに、この時にはなぜか、「オンマ、オンマ」と朝鮮語で母を呼びながら、歩いたのを覚えています。朝鮮語も身につけていたのでしょうか。母のようにペラペラではありませんが、今でも少しは朝鮮語がわかります。

小学校は、日本人と朝鮮人で別々でした。朝鮮人は朝鮮人ばかりの学校へ行っていました。が、学校では日本語を教わっていました。

私たち日本人の小学校は、戦争前が尋常小学校といい、戦争が始まると国民学校に改称されました。私は尋常小学校で入学し、1年生のときに国民学校に変わりました。小学校の6年間で戦争だったので。だから、本当に勉強はしませんでした。

小学校では、寒さの厳しい冬も石炭は軍隊の貴重品なので使えず、ストーブで燃やす松かさなど、脂を含んだ木の実を山に取りに行ったり、畑を耕しに出たりしていました。飛行機のガラス代わりにする、10cm四方ほどの雲母を配られて、「今日は10枚ずつ」「今日は5枚です」と宿題に持たされ、先の尖ったカッターのような道具で、薄くはがしてオブラートのような状態にして提出したこともありました。竹槍やなぎなたの練習もしていました。あるいは清津の灯台まで足腰を鍛えるといって往復したこともありました。

ある時は「兵隊さんの馬にやる飼葉を持ってくるように」と言われました。小学生の子どもに用意できるわけがありません。母に言う朝鮮人の女中さん・オモニを呼んで、お金を渡し、山で草を刈らせて、それを小学校に提出しました。

また、「毎朝、空き缶を一つ持つてくるように」と言われたこともありました。持つていかないと学校へ入れてくれません。道端に落ちている釘一本でもよいので、鉄のものを持つていかなければ校内に入れなかったのです。

お弁当は白いごはんを持つていくと、先生に叱られました。お弁当の時間に先生が回つて歩いて、麦ごはんでなければダメだと言われたのです。

それが私の小学校時代でした。今では考えられないことだと思えます。

小学校の頃の冬の思い出にソリに乗って遊んだ記憶があります。父が2本の竹の先を火であぶって曲げ、その上にみかん箱をのせてこしらえてくれた遊び道具でした。私は子分たちに「消しゴムをやるから」などといって、ソリを引かせて遊びました。

また、小学校では冬になるとスケート場が作られました。先生方が地面に囲いをして、水をまいておくと凍るので、それをスケート場にして、運動靴にスケートの刃だけをくくりつけて滑りました。スケート靴の刃も配給だったのでしょうか、私はとうとう滑れませんでした。

父は兵隊にとられるまで中屋本屋で番頭として働きました。その頃は母と喧嘩をすることもなく、仲良く暮らしていて、憲樹、憲二郎、俊朗と生まれました。引き揚げ後に産まれた貞彦と、男の子ばかり4人の子どもを授かっています。

清津で生まれた三男・俊朗は1歳になるかならないかの、5月の初節句に天然痘で亡くなりました。朝鮮部落で天然痘に感染したようです。

朝鮮の子どもたちは、いつも裸足で、シラミはいないまでも身体も汚れていましたから、母から「朝鮮部落へは行くな、行くな」と言われていましたが、私は遊びに行っていました。俊朗を背に負ぶわされ、子守をさせられても、友だちに付いて遊びに行っていて、俊朗が病気になる、母からは大目玉をくらいました。私は幼児の時に天然痘の予防接種・種痘を受けることができたが、俊朗が生まれた頃には戦争が始まっていて種痘もなかった

のです。俊朗は全身に水ぶくれができて、高熱を発し、目が真っ赤に充血して、あつという間に死んでいきました。

後々、母は「あの子は清津で死んでよかった。一緒に引き揚げても助からなかったろうから、山に捨てられてしまうより、お葬式もできて、お骨も持つて帰ることができて、その方が幸せだったろう」とよく言っていました。私もそう思います。俊朗の骨箱は、引き揚げ時にお金や指輪などの貴重品を隠すのに役立ちました。小さな骨箱を5歳の憲樹か首から下げて歩いていましたから、骨箱の中まで調べられることはありませんでした。

父が42歳で徴兵され、濟州島へと向かった際には「万歳、万歳」と送り出しました。終戦後、父は、私たちより早くに日本へ帰ることができました。